

旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部
会員向けニューズレター
発行人 古川 彰久
事務局 〒252-0321 神奈川県
相模原市南区相模台 1-23-9
Tel.&Fax.
042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
E-mail: info@iki2life.com

1 月例会ご案内

1 月 1 1 日 木曜日 18:30 ~ 21:00
テーマ : 中山正和氏及び HBC モデルについて
場所 : 港区商工会館
参加費 : 1000 円
担当 : 榊原 高明

10 月の例会で私の創案した式 $[M] \times [h] = \pm$ について説明し、その中で森正弘氏を紹介しました。

また 11 月、12 月の例会では、引き続き森氏の仏教をベースにしたユニークで本質を突いた思想や考え方を討論しました。

1 月の例会では、やはり仏教に精通し、これを脳の機能・構造と関連付け、発想法として広く知られている「NM 法」の創始者であり、また、創造工学を提唱した中山正和氏とその理論や思考法を紹介します。

中山正和氏略歴

大正 2 年 (1913 年) 山梨県生まれ。
旧制四高、昭和 14 年北海道大学理学部物理学科卒。
日本電信電話公社電気通信研究所調査役、日本楽器製造 (株) 企画室次長を経て、(株) 創造工学研究所代表取締役、発明会社 I.T.C 会長を歴任。
元金沢工業大学教授。サイバネティクスと大脳生理学より創造工学を提唱。画期的な創造性開発法として、NM 法、及び工学禅を創始。
「ちえ」の会、工学禅研究会を主宰。

中山正和氏著書

「NM 法のすべて」「ちえの構造」「生きざまの科学」
「天才脳の構造・釈迦の悟り」「悟りの構造」「発想法のすべて」「たとえ話しの効用—法華経の読み方」(産業能率大学)、
「発想の論理」「カンの構造」(中央公論社)、
「工学禅」(日本能率協会)、
「知恵の再発見」(講談社)、
「創造性開発の秘術」(青龍社)、
「洞察力」「創造力の伸ばし方」「運のよい人、悪い人」
「考えて仕方があること・仕方がないこと」「創造脳開発法」「仕事が趣味になるスゴイ本」(PHP)、

「独創企画力」(日経連広報部)、
「瞑想と潜在能力」(大陸書房)、
その他「創造性の自己発見」「禅と脳」「新・発想の転換法」「新・企画力」その他多数あり。

中山氏の著書は、一見易しそうに見えますが、仏教の難解な経典を援用したり、数学の複素数や不確定原理を用いるため、真に理解するのは大変です。

1 月の例会では、中山氏が創り上げた思考構造モデルである、「HBC モデル」(Human Brain Computer) を紹介します。このモデルは極端に言えば、人の思考、行動、成功・失敗、運・不運など、ほとんどのことが説明可能です。

ご参加の皆様とこの「HBC モデル」について討論したいと思います。

1 1 月例会報告

1 1 月 9 日 木曜日 18:30 ~ 21:00

テーマ : 「森 政弘」氏について

場所 : 港区商工会館

担当 : 自由討論

森 政弘氏の著書を読んだ要約が榊原氏と古川彰久氏及び石田金次郎氏から提示されたが、榊原氏は10月例会報告の通りですので、古川彰久氏及び石田金次郎氏の内容を以下に報告します。

I. 古川彰久氏

森 政弘氏が現在の科学の最先端の分野であるロボット研究において我が国の第一人者でありながら、仏教者として心の問題を取り上げておられることに興味を持ったので、森 政弘氏の著書として、

「退歩を学べ」ロボット博士の仏教的省察を取り上げます。

要旨

1. 「退歩」と「進歩」について

(1)「須く回向返照の退歩を学すべし」とは、禅者の間では有名な、道元禅師が書かれた『普勸座禅儀』(あまねく勧める座禅の仕方)の中の金言である。これは解決を外に求めて(これを進歩という)あくせくするのではなく、歩を止めて座禅をして心を落ち着け(これが退歩)智慧の光を回し廻らして自己の内面に当て、仏性を照らし出せ、というふうに解釈してよいであろう。

(2)進歩に対して否定的な意見を述べたものではなく、退歩と同様に進歩も必要不可欠であるという立場をとっている。しかし今日あまりにも進歩一辺倒に偏り過ぎて、進歩の悪弊が現れ、進歩自身がナンセンスなことになりかかってきたので、退歩に重点を置いて記述したわけである。

(3)人間はえてして、一方(たとえば進歩)だけを取り、他方(退歩)を捨てるという愚行を犯すが、それは「陰陽合一」という天地の道理に暗いからである。心を静めて省察すれば、進歩と退歩とは、光と影、昼と夜のように、「陽」と「陰」として互いに伴い相助け合うものであることが分かる。

(4)仏教では、「進歩」というときは自分の外側、つまり物や資産に着目した姿勢を言い、それに対して「退歩」とは、内側、すなわち心を問題にする態度を言う。

しばしば「心のことをなおざりにしてきたからだ」という言葉を耳にするが、それは「退歩を忘れたからだ」と言い直しても当たっている。ゆえに「退歩を学べ」というタイトルの本書は、「心の問題に目を開いてほしい」という願いを込めた内容になっている。

2. 徹した思想「一つ」

(1)一つの事柄をスムーズに運ぶためには、まず第一に、プラスの要因(陽)とマイナスの要因(陰)との両方が

必要であり、第二には、その両者をけんかさせるのではなく「一つ」に溶け合わせ、協調するように運営することである。これを、+と-、あるいは陰と陽という正反対の二つを一つにまとめる、すなわち合一させるという。

(2)人間は考える動物と言われている。そして考えるためには言葉を使う。知性の旗印とも言うべき、この言葉が実は非常なくせ者である。言葉には「合わせる」とは反対の「分ける」という本性がある。言葉が表す概念は、物事を大:小、善:悪、美:醜、好き:嫌い、というように、互いに対立し相反するものに二分するという本質を有している。思考は、その分けられた一方だけを組み合わせで構築される。

一般のわれわれが、優れたもの、良きものと信じて疑わない知性というものこそが、物事を二つに分ける(分別する)大本であり、これが「一つ」への接近を不可能にする原因だったのである。

(3)われわれは、この地聖なるものの殻を破って難関を突破して、二元対立の束縛から解放されなければならない。それには分別とは逆方向の無分別の方向を目指さねばならない。知性というものを超えるより他はなく、何があるのかと言えば、それは「直覚」あるいは「直観」である。

この「直覚」による合一に、仏教では「即」という文字を当てている。この「即」こそは、人間一般の知性を超えた「直覚」あるいは「直観」の世界のことなのである。有名な色即是空、空即是色の即である。この即こそは、「異なるものは同じだ」という無分別を表すもので、二元対立からの解放である。

(4)仏教は理屈よりも実践を重んじる。要するに口先で理屈を言うよりも修行せよということである。修行して心の底の底までが清らかに掃除できれば、「一つ」にも「二つ」にもとらわれない、【一つ】が実行できて、問題を起こさないどころか、万事が真理のルールに乗ってすらすらと運ぶようになってゆくのである。

(5)ここに人類最高の智慧—無分別智—が観られる。無分別智は仏のものである。この智慧(知恵とは区別して智慧と書く)には主観と客観の対立はない。主・客は合一しているのである。それは実践としては、座禅・念仏・唱題をはじめとした、我を忘れるまで精神統一する三昧である。このゆえに、「一つ」の思想こそは、カントやヘーゲルの哲学をはじめとする西欧の大哲学よりも上位に位置するのである。

3. 「内側発想」について

(1)退歩を学ぶための重要ポイントは、原因を内なるわが心に求める姿勢である。筆者はこの姿勢を「内側発想」(陰)と呼んでいる。これに対し現今多く行われている、原因を外なるものや他人のせいにする姿勢を「外側発想」(陽)ということにしたい。

(2) 「内側発想」の例題

①授業の面白さ、②鳥は電線から何故落ちないか、③カンニングが成仏する、④おばあさんの頭が悪いから、

⑤内側の状態で聞こえ方は大違い、⑥「待ち遠しい」というのは内側発想、⑦病を楽しむ

II.石田金次郎氏

「親子のための仏教入門
・・・我慢が楽しくなる技術・・・」

2011年幻冬舎（幻冬舎新書）を読んで

森政弘先生は、ロボット工学の大御所かつ仏教研究家です。

ロボット工学と仏教がどんな関係なのか。序文に、先生は「ロボットのお蔭で仏教を理解することが出来た、この二つは併存しているのではなく、一つに溶け合っている」と語っています。

「我慢が楽しくなる技術」という副題がついていますが、これは仏教の教えの中にたっぷり入っていると述べています。

読んでみて、理解できるかどうか自信が無いが、依然として仏教は奥深いと思います。述べられていること、感じたことを以下に纏めました。

(仏教研究の奇縁は)

同氏は昭和 28 年から大学の研究室で自動化の研究を始め、器用な「機械の指」を作らねばならないと発想したものの、周りの抵抗にあい、漸く昭和 45 年に柔らかな頭の自由研究グループ「株式会社自在研究所」を立ち上げた。その年の忘年会を臨済宗の禪寺で参禅した。その折に住職から、「自在」は仏教用語であると教えられ、般若心経の注釈書を頂いたのが仏教との出会いです。

(仏教とは)

仏教は最終的には「なにものにもとらわれない」柔らかい心を練り上げる事を目標にしている。例えばキリスト教を信じながらも仏教は出来るし、キリスト教を徹底的に学ぶことも仏教であるし、自由自在は仏教の要で、束縛を解きほぐして自由な身にしてくれるなど語っています。

一方で、仏教が本当にわかるには、「宇宙のはたらき」を感じ取れなければならないと言っています。この宇宙のはたらきを理解するために、良寛さんの詩を引用しています。

「花は無心に蝶を招き
蝶は無心に花を尋ねる
花咲く時蝶来り 蝶来る時花開く
吾また人知らず 人また吾を知らず
知らずして帝則に従う」

この詩の眼目は、一つ目は自然が人間の考えも及ばない深遠な設計になっている事、二つ目は帝則に従い法則から少しも外れていない、という 2 点です。仏教では、法則は真理ともいい、真理そのものが仏であり、法身の仏とも表現しています。

(宇宙のはたらきとは)

「宇宙のはたらき」とは、真理とも宇宙の大生命ともいわれ、仏教ではこれこそが本当の姿、実相だと言います。それは普通の常識と違って、我々が目の前に見ている現象世界は、うわべの仮のもので、幻のようなもの、影のようなもの、残像のようなもの、響きのあるようなものとたと

えています。相対的なものを超越した永遠のものなので

す。
この世の本当の姿、実相を知れば、自分を含めて全てのものに仏性があることがハッキリわかります。自分とはこの体だと思い込んでいたのが、大宇宙へと広がり、自分と大宇宙は一体だという気がしてきます。少なくとも自分の中に宇宙の大生命、真理が宿っていることに気づいて大きな揺るがない自信がわき出ます。この世の実相が分かることは仏教の知恵の基本の中の基本です。(感想) 難しいな～！

(三性の理)

これは、仏教の知恵の一つであり、善悪を明確に教えてくれる理です。世界に色々哲学がある中で、「無記」という考え方を発見したのは仏教哲学だけです。「無記」は「善でも悪でもない物事」で「善・無記・悪」を三性と呼んでいます。

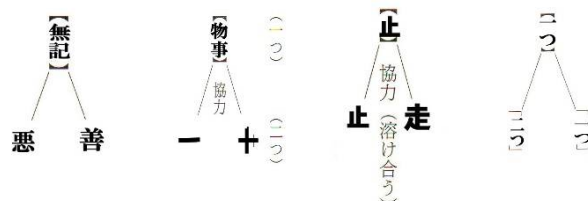
仏説の説く三性の理論を図式化すると、正反対の二つが溶け合って一つになるというか、逆に一つの物事から正反対に二つがでるというか、下図のような形になります。

つまりプラス的な物事とマイナス的な物事どちらか一方を好み、もう一方を嫌うような事はしないで、両方協力させて物事はスムーズに進んでいく事を表しています。

(哲学的には二元性一元論と言います。)

この【一つ】こそが、仏教の目指す本当の一つなのです。「一つ」にならなければならない時は、「一つ」の考え方をし、「二つ」にならなければならない時は「二つ」の考え方をすることです。【一つ】が実行できて、万事真理のルールに乗って運びます。

仏教の図式例



(所感)

ロボットは、センサーとコントローラーとアクチュエーターから設計されている。それは、自然の法則に従い、且つ二元性一元論の考え方が必須であり、ロボットと仏教が溶け合っているのが分かったような気がした。

(我慢について)

仏教は「無我」という偉大な真理を発見し、「我」は錯覚だと言うことが説かれています。「無我」の真理が分かれば、我慢など霧が晴れるようにどこかへ消えて無くなります。無我の真理こそが我慢を消す特効薬なのです。無我を身につけましょう、と言っている。

悟らないと難しいと感じた次第。

以上

